

大船渡市での 映像制作ワークショップへの 学生ボランティア派遣を通じた 災害ソリューション実践

2014年2月3日(月)

東京工業大学大学院 社会理工学研究科 特任助教
白川 慧一

「災害ソリューション実践」とは

2

- 3.11以後、東工大としてできることを模索。
- ボランティアを必要としていたNTTドコモ・モバイル社会研究所とマッチング。
- **大学院講義「災害ソリューション実践」**
 - 2011～2013年開講。
 - ボランティア活動を通じて、学生に復興に何ができるか考えてもらう。
 - 専門分野に制限を設けず、全学の学生を受け入れてきた。



「災害ソリューション実践」の活動

3

- 行政文書のデジタルアーカイブ(初年度のみ)
 - 岩手県遠野市で実施。
 - 震災発生～7月までの震災に関する行政文書、約2500枚をデジタル化。
- 映像制作ワークショップの実施(**本日の話題**)
 - 岩手県大船渡市で実施。
 - 現地参加者と学生がチームを組んで、ムービーを制作する。
 - 取材・撮影～編集～上映まで、あわせて3日間。
 - 撮影には、タブレット端末を用いる。

年度別の開催実績

4

- 2011年(8/2～4、8/9～11、8/23～25)
 - 参加者数:学生30名(アーカイブ化参加13名を除く)、現地参加者33名。
 - 21本のムービーを制作。
- 2012年(7/31～8/2、8/7～9)
 - 参加者数:学生26名、現地参加者34名。
 - 12本のムービーを制作。
- 2013年(7/29～8/2)
 - 参加者数:学生24名、現地参加者24名。
 - 8本のムービーを制作。

出発前: 事前学習の実施

5

- 復興に携わる専門家の講義。
- 本番と同じ機材を用いた映像制作の練習。



1日目: 自己紹介、撮影練習、構成決め

6

- 学生と現地参加者がはじめて顔合わせ。
- タブレットを用いた撮影の仕方を学ぶ。



2日目: 取材と撮影

7

- 制作するムービーの構成を決めた後、取材と撮影を行う。



3日目: 編集作業、上映会

8

- 学生が中心となってPCを操作し、現地参加者の要望にあわせて映像編集する。
- 最後に上映会を行い、完成したムービーを皆で見る。



映像制作ワークショップの特長

9

- タブレット端末を用いることで、シニアの方でも簡単に操作、撮影できる。
- 高いITリテラシを有する学生が編集に携わることで、短期間での映像制作を可能としている。
- 現地参加者と学生で完結した映像制作を行うことができる。
 - 被災者が自分の言葉で、みずから発信できる。
 - マスメディアでは報じられないような情報を発信できる。

制作されたムービーの例

(1)「災害を受け止めて」(2011)

10

- 「津波は地球の営みであり、津波が来ない保証はないのだから、我々はこれに備えて生きていかなければならないし、我々人間の生き方を考えなければならない。」



制作されたムービーの例

(2)「元気です、崎浜」(2012)

11

- 崎浜は、津波の被害が大きかったにもかかわらず、テレビ等で報じられることがなかった。



制作されたムービーの例

(3)「やんちゃ椿むすめの珍道中」(2012)

12

- 大船渡を観光するという形で、復興の様子を紹介してゆく。



制作されたムービーの例

(4)「大船渡の立根町」(2013)

13

- 立根町は、津波の被害こそなかったものの、その後ホテル等が移転し、大きく変貌している。



映像制作ワークショップが現地参加者にもたらす効果

14

- ワークショップ参加によるレクリエーションの効果
 - ワークショップ終了後のアンケートでは、タブレットを使えた点、普段接する機会のない若い学生と交流できた点が好評であった。
- ワークショップの継続開催による効果
 - 年を経るごとに、重傷を負った方、仮設住宅住まいの方など、それまで心情的に参加できなかった人の参加が増えていった。
 - 2013年は、仮設住宅からの参加者が2割にのぼった。

「タブレットのつかい方が覚えて嬉しいです。」
「全国からあつまった学生さん達と一緒に3日間の楽しい時間をすごした思い出とすばらしい映像が出来上がったうれしさがありました。」

映像制作ワークショップが学生にもたらす効果

15

- 学生は、映像制作の過程で、必ずしもムービーには現れない様々な発見をしている。
- 学生が期末レポートで書いた感想は総じて、現地の方々は震災によって心の傷を負いながらも、明るく前向きに生きようとしている、というものだった。

地元の人々はまだ震災のことを心に残しながら絶望の気持ちを抱いているのか、それとも心に傷を抱きながらも一生懸命にそのことから逃れようとしているのか、未来に向かってやる気に満ちているのか。人によってその細かい状況は把握できませんでしたが、みんな過去の傷を引きずりながらも未来に向けて前向きに歩いていることを住民と接して思ったことの1番だとも思います。(社会学・修士1年)

学生による発見： 現地の人々の間での境遇の格差

16

- 「津波被害の差は、人々の間に精神的な差をもたらしている。」

津波の被害はその土地の高さや海・河川からの距離によって変わり、細かい地域の中でも差が出やすい。参加者の方が動画としてメッセージを出すときに気にされていたのが、「自分たちは津波直接の被害を受けていない」という事であった。スーパー・商店街・鉄道の被害によって日常生活は破壊されてしまったが家や車や家族が津波にあったわけではない、という遠慮の気持ちがあった。これは動画のための取材中に特に露わになったが「ここまで津波が来た」「ここは高いから無傷だった」という狭い地域内での差が出来てしまっているのだった。参加者同士の中でも私の車はすこし水をかぶったがあの人の車は大丈夫だった、とか非常に細かい精神的な差があった。私が事前に予想していた関東と現地での情報量や地震被害の差だけではなく、現地内での津波被害の差があるのは驚きであった。この差は実際の被災地域以外からは見えづらく非常に認識しづらいと思う。(物性物理学・修士2年)

復興に対する学生の考え方の変化： (1)非合理的な計画・デザインの必要性

17

- 「復興を進めてゆく上で、非合理的な部分も認めて計画、デザインすべき。」

支援物資を配布する時も、いらぬ物まで持ち帰って後で捨てる人がいるところもある。何もなくても物資がもらえるので、被災前よりも太っていく人も、それを「津波太り」という…。同じ集落でも、仮設に入居した人と自宅に残った人との間に溝が生まれたところも多いのである。

震災は日常生活の中で保たれていたあらゆるバランスを壊してしまう。コミュニティの関係や生業、ライフスタイル…今まで無意識のうちに前提となっていた環境が壊れてしまうことによって、このような軋轢やモラルの崩壊が起きてしまうのだということがよくわかる。…そこで生活を続けていくのは、そこに住む人なのだから、合理的にはいかなない部分も認めた上で計画、デザインの必要性を感じた。(社会学・修士1年)

復興に対する学生の考え方の変化： (2)津波察知と防波堤の高さ

18

- 「海の異変を察知し、避難することを考えれば、必ずしも高い防波堤が良いとは限らない。」

大船渡市が他の地域に比べて、死者や行方不明者が少なかったのは、「他の地域に比べて防波堤が低く、海を直視できる状況にあった」からようです。他の地域では防波堤が高いために、海の異変を察知できずに避難が遅れてしまったようです。…ただ闇雲に高い防波堤を建てれば良いというわけではない、ということがわかり、防波堤建築に対する賛否両論の見方が変わりました。(基礎物理学・修士2年)

おわりに：映像制作ワークショップの成果

19

- 被災地の姿を、現地の人々が自ら編集して、ムービーにして発信する。
- 現地参加者は、映像制作の過程で、ため込んでいた震災に対する想いを語るとともに、制作過程を楽しむことで日常において「楽しみ」が何であったかを思い出す。
 - 震災による心理的、精神的なダメージからの回復につながる。
- 学生(⇒専門家)は、複雑な現地の状況を目の当たりにし、復興の取り組みを見つめ直す。
 - 将来、レジリエンスの確保に寄与する技術、計画の創造につながることを期待される。

参考資料・リンク

20

- 各年度ごとの活動の詳細は、下記のリンク先をご覧ください。
 - 東京工業大学大学院社会理工学研究科「災害ソリューション実践」ホームページ
(<http://www.dst.titech.ac.jp/event/saisol2013/index.html>)
 - NTTドコモ・モバイル社会研究所「被災地ワークショップ2013活動報告」
(<http://www.moba-ken.jp/research/2013/2013.html>)
- 初年度(2011年度)の活動の考察は、下記の書籍(とりわけ6章)にまとめられています。
 - 本條晴一郎・遊橋裕泰著、NTTドコモ・モバイル社会研究所企画「災害に強い情報社会—東日本大震災とモバイル・コミュニケーション」NTT出版、2013



ご清聴ありがとうございました。



東京工業大学大学院
社会理工学研究科

Special Thanks to
(株)NTTドコモ モバイル社会研究所
NPO法人 夢ネット大船渡